

CIDIR Report

東京大学・福島大学 原子力災害復興連携フォーラムを開催

関谷 直也

CIDIRでは、2016年より、東日本大震災における東京電力福島第一原子力発電所事故の研究を進めるため、福島大学小山良太教授、丹波史紀准教授（現立命館大学准教授）を客員教員として迎え、研究・教育面での協力を行っている。その一環として、去る12月5日、東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センターは、福島大学農学系教育研究組織設置準備室との共催で、東京大学大学院情報学環福武ホール・福武ラーニングシアターにて第一回福島大学・東京大学原子力災害復興連携フォーラム「東京電力福島第一原子力発電所事故後の風評被害に関する懇談会」を開催した。

本フォーラムは震災から7年目を迎えるにあたり、震災から復興の途上にある福島県の抱える現状、農業、農産物流通の課題を在京のメディア、省庁などに再認識してもらうことを目的として実施された。まず、東日本大震災から6年が経過した福島県産の食品に関する検査体制・検査結果の概況、現状を確認した。そして、消費者意識や流通の動向についての、福島大学・東京大学で実施した2013年より経年的に行っている共同調査、2017年に行った初の国際比較調査の分析結果の報告を行った。

具体的には『風評被害の現状と実態調査報告』と題し、福島大学経済経営学類・農学系教育研究組織設置準備室の小山良太教授による司会のもと、福島県農林水産部水田畑作課主任主査丹治善仁氏より『福島県産食品の検査体制ー米の全量全袋検査を中心としてー』、高田大輔福島大学農学系教育研究組織設置準備室准教授より『福島県産の農産物の輸出における現状と課題』、関谷直也福島大学うつくしまふくしま未来支援センター客員准教授（東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター特任准教授）より『国内と諸外国における風評被害の実態ー2017年度調査および国際比較調査より』についての報告が行われた。

その後の参加者と発表者の意見交換では、特に、米を中心とする現状の検査体制、国内の不安感および関心の低下、国際比較調査から明らかになった海外の根強い不安感などを中心として意見交換が行われ、福島県の復興の

現状についてアップデートしていく必要性が論じられた。メディア関係者、後興庁や消費者庁ほか省庁関係者を中心に92名の参加者を得て、熱心な議論が行われた。第二回の開催を望む声もあり、盛会のうちに幕を閉じた。なお、本フォーラムの反響は大きく、福島民報、福島民友、河北新報の各紙は1面のトップニュースとして、他にもNHKニュース、朝日新聞、共同通信等で大きく取りあげられた。

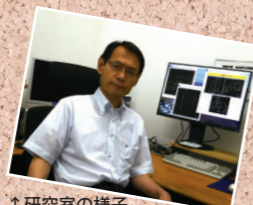
福島県内の農業従事者、農業関係者の努力によって全量全袋検査やモニタリング検査などが実施されてきたが、現在、新たな検査体制に移行しようとして議論が進められている。だが、福島県内の農業も含めた産業の再生、国内外の風評被害には多くの課題が残されている。これから長期にわたってこの課題と向き合っていくことが必要である。CIDIRでは今後も原子力災害について研究をすすめていく。また、本フォーラムによって、福島県外での情報発信の重要性も確認された。今後とも、広域避難、水産業、廃炉などを課題として、研究集会を実施していく予定である。



Feature 鷹野先生とCIDIR



↑2008年CIDIR設立時のメンバー（左から田中秀幸、古村孝志、橋元良明、鷹野 澄、田中淳、大原美保、須見徹太郎の各先生）
2017年アリゾナ州立大学と共同研究→（大学近くの植物園にて）



↑研究室の様子（画面はIT強震計のリアルタイム表示）



編集後記 CIDIRの窓から

草津白根山の噴火で被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

安田講堂を含む学内のエレベータのいくつかには、東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センターと東京大学地震研究所が共同開発した、緊急地震速報を活用した停止システムが組み込まれています。これは、CIDIR設立時より在籍し、今年度末で本学を定年退職する鷹野澄教授の研究成果です。IT強震計を用いた学内地震速報メールや、学内放送設備を用いた緊急地震速報伝達など、鷹野教授は学内防災に資する研究開発を推進し、実装に努めてこられました。これらのシステムの真価が問われるのは、先生の退職後となりそうですが、CIDIRは引き続き、大学本部と協力して学内防災のバックアップ体制を敷いて参ります。（三宅）

CIDIR Chronicle (2017.11.1 ~ 2018.1.31)

- Nov. 2 第94回ライフライン・マスコミ連携講座：「南海トラフ沿いの地震観測・評価に基づく防災対応検討ワーキンググループ 検討の背景と報告のポイント」
- 4 ベトナム南部のニャチャン市近くに台風23号(ダムレイ)が上陸。死者69人、行方不明者30人超（11月7日AFP）
- 6 沼田講師、ジャカルタで開催の『The 8th Annual KIN ASEAN Forum 2017』にて口頭発表：「Save Life, Save Our Future」
- 12 イランとイラクの国境地域で強い地震が発生、両国で合わせて483人が死亡、一万人超が負傷（11月14日AFP）
- 15 ギリシャ中部で豪雨の影響による洪水が発生、冠水被害に遭い15人が死亡（11月16日AFP）
- 24 日黒教授、『日本学術会議：災害レジリエンス構築のための科学・技術国際フォーラム』にて講演：「Towards Implementation of Build Back Better」
- 26 田中センター長、東北大学で開催の『内閣府主催防災推進国民大会2017テーマセッション』にて登壇：「保険・共済をはじめとした個人・企業の備え」
- 29 関谷特任准教授、岩泉町役場で開催の『平成28年台風10号災害に係る報告会』にて講演：「2016年台風10号災害における情報伝達と避難」
- Dec. 1 ベンガル湾で発生、インドとスリランカに接近した大型サイクロン「オキ」により、インドで250人以上、スリランカで27人の死亡が確認される。1月経過後も漁師660名以上が依然不明（12月28日AFP）
- 5 関谷特任准教授、情報学環福武ホールで開催の『第1回 福島大学・東京大学原子力災害復興連携フォーラム「東京電力福島第一原子力発電所事故後の風評被害に関する懇談会」』にて講演：「国内と諸外国における風評被害の実態ー2017年度調査および国際比較調査より」
- 11~13 鷹野教授、ドイツミュンスターで開催の『第4回 Information and Communication Technologies for Disaster Management (ICT-DM) 国際大会』にて口頭発表：「Spatio-Temporal Estimation of Mobile-Phone Call Demand in the Kumamoto Earthquakes」
- 14 第95回ライフライン・マスコミ連携講座：「荒川下流域の水害リスクとそれを踏まえた取り組みについて」三宅准教授、米岡地球物理学連合 AGU の『Himalayan Earthquakes: Observations, Processes, and Tectonics セッション』にて発表
- 17 フィリピン東部で台風26号(カイク)の影響で土砂崩れが発生し26人が死亡、23人が行方不明（12月17日AFP）
- 24 フィリピン南部ミンダナオ島を台風27号(テンビン)が直撃、死者200人、行方不明者140人超（12月24日AFP）
- 27 東京大学情報学環ダイワユビキタス学術研究館 ダイワハウス石橋信夫記念ホールで開催の、『第3回 東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター (CIDIR) フォーラム「これからの地域防災を考える」』にて、山梨大学准教授、南澤長野県火山防災幹が講演
- Jan. 3 コンゴ民主共和国の首都キンシャサで豪雨による洪水と土砂崩れが発生し、44人が死亡（1月6日AFP）
- 11 第96回ライフライン・マスコミ連携講座：「荒川に災害をもたらした過去の気象状況」米カリフォルニア州南部サンタバーバラ郡で豪雨による土石流が発生し、17人が死亡、43人が行方不明（1月12日AFP）
- 10~16 片田特任教授、ニカラグア・グアテマラへ JICA 中米広域防災能力向上プロジェクト短期専門家として派遣
- 18~19 鷹野教授、国立情報学研究所で開催の『電子情報通信学会 CQ 研究会』で口頭発表：「熊本地震における時空間携帯通話需要の推定」
- 22 発達する低気圧とその後の強い冬の気圧配置によって大雪となり、宮城県で死者2名、山形県で死者1名、新潟県で死者1名、重軽傷者は11の都道府県で計827名（1月25日消防庁）
- 23 群馬県草津白根山で9時59分に噴火が発生、同日11時05分に火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表・同日11時50分に火口周辺警報（噴火レベル3、入山規制）を発表。噴火による人的被害は死者1名、重傷3名、軽傷8名（1月24日消防庁）
- 30 蔵王山に火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引き上げ（1月30日気象庁）

Contents

- 特集：鷹野先生のご退職に寄せて..... page.2~3
- CIDIR Report : 東京大学・福島大学 原子力災害復興連携フォーラムを開催 page.4
- 編集後記：CIDIRの窓から page.4

鷹野さんのこと

ト部 卓

地震研に私が入ったのは1988年春でした。それ以来2015年に退職するまでずっと観測系に所属していて、情報センターの鷹野さんと同じ部署になることはありませんでした。地震学で観測系と情報系が密接な関係をもつのは当然ですが、それでも1990年頃までは、これらが連携して動くことはまれでした。その風向きが変わってきたのは1990年代でした。気象庁がそれまで大学等の専売特許であった高感度地震観測網に進出してきたことにより、それぞれの地域に張り付いて微小地震観測を続けてきた大学も危機感をもつようになってきました。

また日光地域での合同観測や兵庫県南部地震の合同余震観測が、大学間の観測協力を促しました。一方でインターネット回線の普及が進み、大学間のデータ交換も拡大してきました。生き残りのために、それぞれの大学で開いていた地震波形データをもっと共有・流通しようという機運が高まってきたのです。地震研の情報センターは、全国の大学の観測情報の流通や利用を促す立場であり、それを先頭に立って地道に進めていたのが鷹野さんでした。共同利用研として全国の大学の研究者にサービスする使命を持つ地震研には計算機やネットワークの維持運用のための専門家が不可欠で、情報科学のバックグラウンドを持つ鷹野さんが招かれていたわけです。

このような中、1996年頃に登場した衛星テレメータシステムが、大学の地震観測とデータ流通を大きく変えることになりました。これは全国の大学観測点の地震観測データを通信衛星を使ってリアルタイムで収集し、各大学へ全国配信するものでした。つまり全国のデータの観測・交換・流通を一挙に実現したわけで、これは地震研の観測系と情報センターが協力しつつ、全国の大学を巻き込んで進めることが不可欠でした。このシステムが気象庁や防災科研とのデータ交換をもたらし、さらには今世紀に入ってからの地上の高速光通信網の発達に乗ってJDXnetへと発展します。これらのシステム開発運用に携わる中で、私にとって鷹野さんは常に頼もしい存在でした。この一連のシステム変革が、同時に観測関係者の意識の変革—データ流通を当然のことと受け入れる—をも促すことになったと思います。

その後、鷹野さんは防災やIT強震計の分野でもおおいに活躍されますが、地震研の情報センターを（しばしば裏方として）長年にわたって支えつつ、地震データ流通・利用システムの発展に尽くしてこられたことこそ、もっとも評価すべきであると私は信じています。

鷹野さんと同僚だった頃

嶺 一起

当然、今でも同僚ですが、1983年6月に鷹野さんが大型計算機センターから着任されて、1993年4月に私が地震研究所内の別の研究部門に転出するまで、地震情報の全国ネットワークとデータベースを担当する同研究所の所内センターの、物理的に同じ部屋に勤務する同僚でした（鷹野さんは講師、私は助手でしたから上司ですが、あえてこう呼ばせていただきます）。20代後半の私は研究者としては紆余曲折してしまっていたのですが、コンピュータに強く関連する担当業務と、生来のオタクの性格が相俟って、当時創成期だった「パソコン」を業務に生かす、みたいなこともやっていました。そこへコンピュータ研究の本流の鷹野さんが着任されたので、亡くなられた石田晴久先生や雑誌bit編集長の小山透さんなど、その方面の錚々たる方々をご紹介いただき、そのご縁が「MS-DOS」という解説書（写真）の共著や、大型計算機TSSへの通信ソフトの共同開発などにつながりました。前者はいまだに中古品がアマゾンにあがっており「MS-DOS解説書の金字塔」のカスタマーレビューをもらっています。後者は大型計算機センター長会議プログラム創造賞を受賞しました。

鷹野さんはもちろん本来業務を責任者として立派に果たされ、そのご経験などからIT技術を地震による災害の軽減に生かす研究をCIDIRや地震研で続けていらっしゃると思います。私の方は転出後ようやく研究者としての方向性が定まり、旧文部省の援助と各大学の協力により大都市圏強震動総合観測ネットワークシステムというプロジェクトを始めて、首都圏に強震動の総合ネットワーク、略称SK-netを構築しました。その際に、再び鷹野さんや、故菊地正幸センター長をはじめ古栗の所内センターの当時の方々に大変お世話になりました。SK-netによる強震動データの研究でScienceに論文を発表することもできました。特に、20年近く経過した現在でもSK-netが継続していることは、鷹野さんの卓越したIT技術とネットワーク管理能力に負うところが非常に大きく、それらが次の世代に引き継がれることを願ってやみません。



鷹野先生のご退任を迎えられた事に対し 荒木 正之

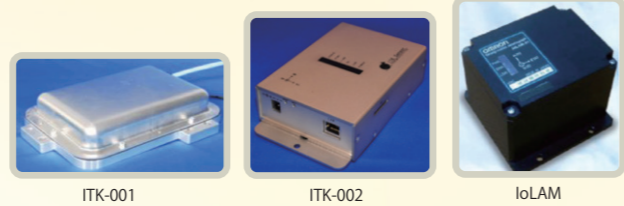
鷹野先生がご退任を迎えられるということで、寄稿のお声掛けを頂きました。私は鷹野先生から株式会社エーラボという会社を設立するきっかけを頂いております。この場をお借りして簡単に設立経緯をご紹介したいと思います。

鷹野先生とは、2006年にIT強震計研究会（以下、研究会）で出会いました。研究会は新しい強震計のコンセプトを語る情報交換の場です。当時の私は地震計という物を見た事もない素人でした。鷹野先生から強震計について教えて頂きながら、2007年にITK-001という初号機を開発、2009年にはITK-002を開発しました。当然の様に考慮不足が多かった開発当初のITKですが、コンセプトである「リモート更新・リモート保守」のお陰で今も成長を続けており、設置から10年以上経過していても最新の機能が稼働しています。余談ですが最新バージョン1891というのが初号機から11年間で行った更新回数です。

また研究会での出会いから、建築用途で「記録から活用へ」と応用技術の開発を行い、関西地震観測研究協議会では実環境に導入して頂く事で実績を積み重ねてきました。そして2010年に当時所属していた会社の事務所閉鎖が転機となり、要素技術開発とIT強震計の製造・応用技術の開発を軸に、当時の同僚を引き連れて独立したのが現在の株式会社エーラボです。

なお、2016年にはIT強震計の製造を株式会社オムロンに移管し、最新の製品はIoLAMという型番で販売されています。鷹野先生のアイデアと研究会という環境が産み出した会社は、気がつけば8期目となりました。IT強震計や防災に対するアプリケーションは、まだゴールには到達していませんが、今後も努力して行く所存です。

最後になりますが、鷹野先生にはお祝いと、心よりの感謝を申し上げます。



鷹野先生との思い出 2話

古 村 孝 志

鷹野先生とのCIDIRでの8年間の思い出の中から2つの話を紹介します。

東日本大震災の時のことでした。鷹野先生と私は会議を終え、池谷さんがいれてくださったお茶で一息つきながらメールをチェックしていました。そこに緊急地震速報が鳴動しました。2日前の宮城沖地震の余震だろうとたかをくくっていたところ、「予測がM7を越えた。これは本物だ!」と鷹野先生の声。そして「建物地震計が揺れ出した、来るぞ!」との叫びと同時に10階のCIDIRがガクンガクンと揺れ出しました。私は窓枠に掴まりながら、床を転がるパソコン、そして土埃が舞い上がる大学構内に動揺し、数分後によりやく揺れが収まった後も呆然としていました。その間に鷹野先生は携帯で室内の写真を撮り回り、地引さんを引き連れて廊下の配電盤のブレーカを復旧させました。私は、難行の末に悟りを開いた高僧の姿をそこに見ました。

土曜の弥生門（安田講堂の裏手の根津駅側の門）でのことです。震災の前か後かは忘れましたが、大学院の入試の仕事が何かを終えて、鷹野先生の車で送ってもらった時のことです。休日の出口を探して構内をぐるぐる回り、ようやく弥生門に着きました。門の扉は閉鎖されていました。高僧がとっさに判断したのは門の横の小扉。車を通るには無茶な空間ですが、あきれの守衛さんを横目に、額に汗を浮かべてハンドルを何度も切り返し、なんとかすり抜けてしまいました。帝国大学開学以来、初めての記録のようです（未確認）。

全く関連のない2つの話ですが、鷹野先生のお人柄が思い浮かぶエピソードを皆さんと共有したく、ここに記しました。

東京大学弥生門。千代田線根津駅より徒歩8分。扉は休日閉門（車両通行不可）。



まだまだ教わるがあります

福 島 隆 史

鷹野さんは酒を飲まない。それなのに酒席を敬遠したりしない。むしろ居酒屋ではメニューに通じり目を通した後、率先して食べ物や飲み物をいろいろ注文する。不思議なのは“定番”よりも、一風変わった創作料理や肴が好きらしいことだ。だって「ミミガーねぎ塩」なんて、普通なかなかな頼まないですよ。

一方で、ウーロン茶のグラスを片手に、私のような呑兵衛のたわいない話にもちゃんと耳を傾けてくださる。大先輩に対して月並みな表現で誠に恐縮だが、本当に好奇心の旺盛な方なのだろう。実際、癖というほどではないのだが、私の知る鷹野さんは、よく人にも尋ねる。「それ何なの?」「どうのこと?」

鷹野さんは決して知ったかぶりをしない。持って回った言い方もしない。興味を持った事柄に、メガネの奥から時に眼光鋭く、単刀直入に切り込んでくる。だから「それ何なの?」という“無邪気な”問いを鷹野さんが発するとき、それはとても自然で、ごく普通に思える。

研究者の中には、専門外のことに對してまるで無関心だったり、門外漢が首を突っ込むのは論外と考えたりする人が珍しくないが、鷹野さんは違う。ちょっとした会話からでも、防災に携わる研究者として抱えている問題意識や関心の幅広さを感じるのだ。

鷹野さんは常々、情報が防災・減災に活かされるかどうかは、その情報を受け手が

鷹野先生と歩んだCIDIR 10年

田 中 淳

鷹野先生とは、2008年の情報学環附属総合防災情報研究センター（略称CIDIR）設立当初から10年にわたり、ともにセンター運営にあたってきた。以前から、日本災害情報学会における活動を通じてそのお人柄や災害情報へのご理解を存じ上げてきた先生が、副センター長としてCIDIRに赴任頂けると分かった時は、心から安堵したことを昨日のように覚えている。

設立当初のCIDIRは、恒久ポスト1と5年見直しポスト1と、合わせて2つのポストという小さな、また不安な組織だった。この組織を、現在の恒久ポスト3、特任教員2まで発展させてきた上で、2010年から加わった目黒教授、設立の連携部局である地震研究所および生産技術研究所からポストを提供いただき赴任してこられた古村教授、三宅准教授、大原准教授、沼田講師ならびに特任教員であった須見教授のご尽力があってはじめて可能であったわけだが、CIDIRの戦略や方針を定めていく上で、鷹野先生の貢献ははかり知れない。

とりわけ、私自身は東京大学という組織に学生の立場からしか接しておらず、研究者としてあるいは教員としての組織の文化や仕組みなど知らないままに、センター長という役割を果たさねばならなかった中で、方針決定に際して、鷹野先生にご判断を仰ぐこ

電算機の利活用で大変お世話になりました

日 黒 公 郎

鷹野先生に最初にお会いしたのは今から三十年以上も前、私がまだ地震研究所で修士の院生をしているときである。CIDIRニュースレターの読者の皆さんの多くは、鷹野先生は地震学、特に緊急地震速報やIT強震計などを専門とする先生と認識されていると思うが、私にとっての鷹野先生は電算機の先生である。

私が所属していた伯野元彦教授の研究室では、当時、粒状体シミュレーション（離散化モデルによるコンピュータシミュレーションで破壊現象の解析に適した手法）を盛んに行っていた。修士の初めは、地震の破壊メカニズム、浸透理論や碁石モデルによるシミュレーションで、ゲーテンベルグ・リヒター式のb値の意味などの研究をしていたが、すぐに私も粒状体シミュレーションをすることになった。私の課題は連続体の破壊現象にこの手法を適用する研究であった。研究室の先輩であった故岩下和義氏（その後、埼玉大学教授）に手ほどきをうけながら、電算機づけの毎日を送っていた。当時、PCと言えばNECのPC-9800シリーズが最も人気で、これをMS-DOS環境で動かすのが一般的であった。そのMS-DOSに関する解説書の金字塔である書籍が、その名もずばり「MS-DOS (OSシリーズ、共立出版)」で、この著者の1人が鷹野先生、もう1人の共著者が同じ地震研の嶺畑一起先生であった。この本は当時格別の解説書がない中で、MS-DOSの内部構造を解き明かしながらユーザープログラムとそのインターフェースを詳しく解説するともに、隠れたノウハウなども記載された優れたものであった。

また、当時はメインフレームと呼ばれる汎用大型計算機の時代で、地震研究所にはHITAC (Hitachi Transister Automatic Compute) があった。大規模な計算にはHITACを使っていたが、このメインフレームに研究室のPCをつないでプログラムをつくらせたり、デバッグをしたり、計算を走らせたりする際に活用していたプログラムが「Eterm」で、この開

どう認識し、どのような行動をとるにかかっていると説く。避難などの行動に結びつかない情報は防災情報として意味がない、とも。

一般向け緊急地震速報の運用が始まってから丸10年が経過したが、鷹野さんは一貫して、気象庁が警報の発表基準を「(顕著な被害が生じにくい) 震度5弱」以上としている点や、「震度4が予想される地域」にまで警報を発表している点を疑問視してきた。一方、東北地方太平洋沖地震のような巨大地震では最初の警報が過小評価になるため、警報の統制の出し方について再検討することを提言している。「日頃は過大で災害時は過小となる警報は根本から見直しが必要」とのスタンスだ。

私は、テレビ局で災害放送に携わる者として、特に東日本大震災の発生以降、鷹野さんから「単に緊急地震速報(警報)を出すだけでなく、後続の緊急地震速報を見て巨大地震の発生を知覚し、その緊迫性を言葉で伝えることを訓練しておく必要がある」と教えられた。

2018年3月、気象庁は緊急地震速報の大リニューアルを実施するが、視聴者の安全を守ることに資する放送や情報提供を行えるよう、鷹野さんにはまだまだ教えを乞いたいと願っている。災害情報学会の広報活動もあるし、引き続き酒席にもお付き合いください。鷹野さんが注文する品々、私も結構好きですから。

とが殆どだった。

災害情報研究としてみれば、CIDIR設立時の大きなトピックは、気象庁が一般供与を始めたばかりの緊急地震速報をいかに社会で活用できるかであった。そのためには、正しい技術理解と情報通信システム、受容側の認識と受信環境など文理融合が求められるという、ある意味CIDIR設立のミッションそのもの研究領域だったからである。具体的には、概要要求事項の特別経費「災害緊急情報を活用した大学防災情報システムの開発」に基づく研究活動がある。全学に緊急地震速報端末を展開し、またパソコン上でも入手できる環境を整備し、また多言語化を進めることができた。また、学内の主要建物に複数のIT強震計を設置し、各建物や各部屋の揺れを観測し、地震検知後に配信する仕組みも構築できた。

CIDIRの研究活動のみならず、大学本部の環境安全本部防火防災部の諸活動を企画・運営でも一緒にいただいた。大学の防災をプランニングしていく上で、地震学から情報工学にいたる幅広い知見を頂いたり、2011年3月11日に発生した東日本大震災をともに経験した仲間でもあった。ご退職後のCIDIR運営を考えると、個人的には不安の方が大きいですが、この場では御礼と今後のますますのご活躍とを申し上げるほか術はない。

発着がやはり鷹野・嶺畑の両氏であった。お2人の名前を知っているか否かは別として、このプログラムの恩恵を受けた研究者はものすごく多かった。私も当初は毎日10~12時間は電算室に閉じ籠っていた。しかし電算室ではコーヒーを飲みながら仕事もできないし、少し大きな声で話をしてしまうと注意されるので、電算機室での仕事はエアコンがうれしい季節や時間のみにして、他は「Eterm」を使って研究室から仕事をするようになった。私は、修論でも博論でも、電算機(CPU)を湯水のように使った。当時は計算の規模で、「A~D」ジョブのクラス分けがしてあり、最大規模のDジョブはかなり慎重に取り扱われていた。しかし私は、伯野先生から、「電算機はいくら使ってもいい」と言われていたことをいいことに、Dジョブの連続投入を日課とし、他の多くのユーザーにご迷惑をかけていた。私が1991年に博士課程を終え、生産技術研究所の助手として地震研を離れる時に、鷹野先生にかけられた言葉を今も思い出す。「生研に行っても、地震研のHITACを使ってよ。稼働率が落ちないように。」それほど使っていたのだ。ただし、使ったCPUに見合うだけの成果を挙げていたかどうかには、全く自信がない。

学生時代、毎日「Eterm」を使っていた私は、その機能を熟知していた。しかし今回、この原稿を書くに際して、鷹野先生から「東京大学大型計算機ニュース」に先生が書かれた「Eterm」関連の資料を送ってもらって読んでみたが、各ファンクションキーの意味などは、全て完全に忘れていた。記憶力の悪さは、ひどいものであるが、こんな私でも、修士論文や博士論文が書くことが出来たのは、鷹野先生、嶺畑先生による著書「MS-DOS」やプログラム「Eterm」があったからである。本当に感謝しています。

最後に、著書「MS-DOS」は大ベストセラーに、「Eterm」は全国大型計算機センター長会議プログラム創造賞(1996年)に輝いたことをお伝えしておく。